

「ハイブリッド車等の静音性に関する対策について」(案)に対する意見書

氏名	井坂 洋士 (イサカ ヨウジ)
住所	〒211-0004 川崎市中原区新丸子東 3-1100-12 かわさき市民活動センター レターケース内 持続可能な地域交通を考える会
所属	(団体名) (部署名) 持続可能な地域交通を考える会
電話番号	050-5809-3400
電子メールアドレス	Isaka@sltc.jp
意見	<p>(意見)</p> <p>今回の問題は、歩行者が気づかないことが問題なのではなく、歩行者に危険を感じさせるようなクルマの運転が横行していることにある。つまり、法制上の歩行者優先の原則を無視し乱暴な運転をする者が横行し、それがまともに取り締まられてもいないことにこそ問題がある。</p> <p>歩行者や自転車利用者が優先、クルマは非優先という原則を打ち立て、それが徹底されることでのみ解決されるが可能である。今回の措置は原理原則に反する上、乱暴な運転者を助長するよう働くものであり、役に立たないばかりか著しく妥当性を欠くものである。「対策」になっておらず、実施すべきではない。</p> <p>(理由)</p> <p>検討委員の皆さんは、普段は道を歩く側だろうか。またはクルマに乗る側だろうか。資料を拝見した限り、おそらく後者の方が多いのではないかと感じられた。また、委員の皆さんに尋ねたい。あなたは自転車にも騒音発生装置を付けて走ってほしいと思うのだろうか。あなたは自動車だけを特別視してはいないだろうか。</p> <p>「静音」には何の問題もなく、むしろ歓迎すべきものである。これは自転車の「静音性」が問われてこなかったことから明らかだ。問題は、破壊力の強い自動車が平然と歩行者を押し退けて走っているような実態にこそある。</p> <p>先日も商店街を歩いていて、後ろからクラクションを鳴らすクルマが歩行者を蹴散らしながら我が物顔に走って行く様を見た。周りの人は一様に、さも当然のように道を譲っていた。毎日の生活圏である生活道路や商店街ですら、歩行者はいつも怯えながら生活道路を歩かされている。一方でクルマに乗る者は、歩行者は道を譲るのが当たり前という面をして、派手にクラクションを鳴らしながら、ただ一人道を譲らない私を睨み付けて走り去った。しかも、これは何も珍しいことではなく、日常茶飯事だ。</p> <p>人と環境にやさしい交通手段が選ばれるよう取り組んでいる者として、様々な理由により道を歩くのが怖いと仰る皆さんの心中は察するに余りあると思っている。さりながら、クルマが優先、歩行者は非優先という路上の実態こそが皆さんを苦しめているのではなからうか。クルマが怖い運転をしなくなるのが皆さんの望みではないだろうか。であれば、今回提案された「対策」は皆さんの期待を裏切ることになる。事の本質を改めずに、むしろ歪な現状を追認するような騒音発生装置の装着義務化を求めてしまうとすれば、将来の私たちに大きな禍根を残すことになってしまう。</p> <p>欧州では、子供や高齢者、障がいを持たれた方などは路上では最優先であり、それを脅かす者は罰せられる国もある。日本では逆のことが堂々で行われており、警察は警音器不正使用などで取り締まることもなく、歩行者は(視力を問わず)怯えながら毎日歩かねばならない。こんな世の中を放置し、助長するような今回の「対策」は看過できるものではなく、実施しないよう強く求めるものである。</p>